

第8回 三國連太郎

先日亡くなった名優・三國連太郎は時代劇にも数多く出演してきた。今回は、そんな彼の魅力が存分に活かされている時代劇たちを紹介していく。

■『夜の鼓』（映画／1958年・現代ぷろだくしょん／監督：今井正／脚本：橋本忍、新藤兼人／出演：三國連太郎、有馬稲子、森雅之ほか）

近松門左衛門による戯曲を映画化したものである。

三國扮する主人公・彦九郎は藩の御納戸役を勤める生真面目な男。美しい妻・たね（有馬稲子）との再会だけを楽しみに、参勤交代の道を故郷に向かっていった。が、帰ってみると周囲の様子がおかしい。誰もが皆、口々に妻が城下の鼓打ち（森雅之）との不義密通を噂しているのだ。

ただひたすら妻を信じて何事もないように過ごす彦九郎だったが、世間体を気にする親族たちが黙っていない。一同は集まり、たねの不義の真相を探るべく証人たちを次々に呼び出して状況を聞いていく。

結局、不義を目撃した者はいなかった。が、帰り際、彦九郎に真相を耳打ちする者が現れる。それを受けて彦九郎は妻を問いただす。妻は耐えきれず、不義を認めてしまうのだった――。

本作の最大の見どころは、妻から不義の告白を聞いてからの三國の変貌ぶりである。当初はどこか青々しい雰囲気、親族会議では東野英治郎、加藤嘉、菅井一郎、殿山泰司ら並入る曲者役者たちに囲まれて存在感は希薄だ。それが終盤、まるで別の人間になる。

妻の告白を聞き、縁側で呆然する彦九郎だったが、突然立ち上がると、妻を平手で叩き始める。そして、首、頭、顔……何発も何発も振り下ろされていく。

この時の三國の表情が凄い。普通の役者であれば怒りで強張らせたり、悲しみに歪めたりするところだろうが、三國の顔には感情らしい感情が浮かんでいないのだ。決して声を荒げることなく、冷たい仏頂面のまま、妻を打ち続けている。それは、殴り終えた後も変わらない。弱々しく肩をすぼめ、妻とは一度も目は合わせない。そこには、誰の目にも分かりやすい感情はどこにもない。とって、何の感情も出ていないのではない。むしろ、一言では表現できない、人間の奥底に眠る激情が、そこから浮かび上がってきている。

表立った感情はたしかにない。その冷たい顔の奥には、悲しみや怒りだけでなく、絶望、屈辱といったものまで含んだ、愛する者の裏切りを知った男の複雑な――だからこそ生々しい――感情が表現されているのだ。それはまるで、能芝居のようである。かつて三國にインタビューをさせていただいた際「駆け出し時代に能を習っていた」と言っていたが、その修練がここで思う存分に発揮されていたのだった。

このシーンは撮影も、実際に壮絶なものであったという。

当時の今井正は家庭が上手くいっていなかったようで、それに対する鬱憤を晴らしたいのもあってか、テストの段階から三國には本気で有馬を殴るように指示する。ただでさえ、役に入ると尋常でなくなる三國にそのようなことを言ったのだから、有馬が只では済むはずもない。何度も何度も三國に本気で叩かれた有馬は「手加減をしてほしい」と願い出る。それを聞いてうなづく三國だったが、またテストになると本気で行ってしまう。

そして、本番に。ここで今井は「今度は本番だから、もっと本気で」と指示を出した。それを受けての三國の張り手に、有馬は失神して倒れてしまう。そして、顔は腫れあがり、元に戻るまでに二時間かかったという。

■『切腹』（映画／1962年・松竹／監督：小林正樹／脚本：橋本忍／出演：仲代達矢、三國連太郎、石浜朗、岩下志麻ほか）

江戸初期、相次ぐ藩の取り潰しにより、町には貧しい浪人があふれていた。彼らの中には、大名屋敷に出向き「玄関先で切腹をさせてほしい」と頼む者がいた。ほとんどの大名家はそんなことをされては迷惑なので、お金を渡して退散させていた。もちろん浪人たちも端から腹を切るが気などない。一種の強請である。が、井伊家の家老は違った。権威に驕るサディストであるこの男は、やってきた浪人に対し、庭先での切腹を許可する。そして、命乞いをしながら自ら切腹して果てていく浪人の様を楽しげに見物するのである。

そんな井伊屋敷に浪人・津雲半四郎が「切腹させてほしい」とやって来るところから、物語は始まる。庭先に引き出された半四郎は、家老に向かって過去の物語を話し始める。それは、自らの家族が貧しさ故に陥った悲劇だった。話を聞いていくうちに家老は気付く。その悲劇を引き起こした張本人が自分自身であることを。そして、半四郎の復讐が始まる。

半四郎を演じるのは当時二九歳の仲代達矢。新劇出身の仲代は、歴戦の勇士で孫もいる中年男に成りきるため、自分の中にある最も低い音階で台詞を朗じるなど、徹底して作り込んだ芝居で役に臨んだ。

三國が演じるのは、悪の家老である。映画畑一筋で育ってきた三國は決して声を張ったり、声色を使うことはない。「三國そのもの」にすら見えてくるような、どこまでが素でどこまでが作り込みか分からない芝居で、仲代を悠然と受け止めるのだ。

この、バックボーンも役作りも対極的な両者の芝居のぶつかり合いが、そのまま劇中の温度を作りあげていく。

ほとんど口と表情を動かすことなく台詞を言う脱力した芝居で、感情のない冷血漢を不気味に演じていた三國。特に、仲代の義理の息子（石浜朗）を竹光での切腹に追い込んでいく場面では、その表情も口調も薄気味悪いまでに冷たく、一切の情け容赦の隙がない。そのため、義理の息子が置かれた理不尽な状況がまるで我が事のように伝わってきて、それに慟哭する半四郎の想いが観客とシンクロする。

一方の仲代は絶えず明るい表情で三國に語りかける。その関係性が、時を経るに従い変化していく。徐々に真相が明らかになるにつれ、それを語る仲代は声をさらに低く沈め、その重低音に怒気ははらんでいく。

対する三國は、一見すると何も変化はない。が、よく見ると視線の向け方や振り返り方といった、ちょっとした仕草により「怖じ気」が伝わるようになっている。追いつめる者と追いつめられる者との心理劇を、両名優はまるで己が技を互いに見せ合うかのように展開しているのだ。

発声から呼吸法まで、全く異なる両者の芝居から聞こえてくるのは、不協和音である。が、名人同士の奏でるその音は不快であるどころか、美しい調べとして胸に刺さってくる。まるで異なるアプローチの芝居をしているからこそ、激しい怒りを胸に抱く半四郎と冷酷な悪鬼の如き家老という互いの性格と対立構造が、余計な説明を交えることなく観客に伝わる仕掛けになっているということだ。

名人の「芸」と、それに裏打ちされた互いに譲ることのないプライドのぶつかり合いに震える作品である。

■『関ヶ原』（テレビスペシャル／1981年・TBS／監督：鴨下信一、高橋一郎、大山勝美／脚本：早坂暁／出演：加藤剛、三船敏郎、森繁久彌、三國連太郎、松坂慶子、笠智衆ほか）

司馬遼太郎の同名小説を原作にした本作には、テレビドラマ史上でも未曾有の豪華キャストが集められている。主人公の石田三成には加藤剛が、その軍師・島左近には三船敏郎がそれぞれ扮している。このいかにも剛直な正義感コンビの前に立ちはだかったのが、徳川家康＝森繁久彌、その軍師・本多正信＝三國連太郎という百戦錬磨の巨怪コンビだった。

加藤と三船が英雄的に躍動するのに対し、この森繁と三國はひたすら暗闇での密談を繰り返す。そうやって策を練りながら人々を思うままに動かし、豊臣秀吉（宇野重吉）死後の天下を我がものにせんとする。

それでも、森繁の家康は戦場をくぐりぬけてきた男ならではの剛直さや、友との別れに涙する温かい一面を芝居で見せてはいる。が、三國の正信にはそうした人間味はまるでない。家康に命じられるままに策謀を張り巡らせ、人の心を操るのが楽しくてたまらないのだ。そのため、策が上手くハマって家康に媚びへつらいに来る大名を前にして「なんとまあ、世間には尻尾を振るのが早い男もいる者よ」と内心つぶやきながら、顔が思わずニヤついてしまうこともある。そういう時は、家康から「シッ」とそれとなく注意もうながされている。

この高慢な策謀家を、三國は実に不気味に演じている。声は決して荒げることなく、いついかなる時でも低く押し殺す。それでいて、家康に策を献ずる時は嫌味な笑顔を絶やさない。そして、家康以外の前では絶えず視線を落とし、感情を見せず、ただ低い声で訥々

と要件のみを伝える。あくまで、家康の影に徹しているのだ。だが、それが一段とこの男の得体の知れなさを増幅させていて、その声が冷たく心に突き刺さり、妖怪的な不気味さをいつも漂わせることになる。

だが、そんな男が最後の最後に一度だけ、人間的な一面を見せている。

関ヶ原の戦いが終わってしばらくして。隠居となった正信が、ある山寺を一人訪ねる。そこでは、三成のかつての恋人・初芽（松坂慶子）が尼となり、三成の墓を守っていた。正信は初芽に「三成の墓に手を合わせたい」と申し出る。「知恵ある者は嫌われる。私はすんでのところで、『徳川の石田三成』になるところを、早々に隠居したから、このように生きておる」。つまり、三成の破滅を目してきたからこそ、それを反面教師に長生き出来ているというのだ。隠居してもなお、高慢な男である。

そんな正信に初芽は「あなたは三成さまとは全く似ていません」と言い放つ。そして、「二度と来ないでください」と言い残して去っていく。

一人残された正信は、こうつぶやく。

「そうか。ワシには初芽がおらん。一人の女も、愛したことがなかった……」

三國の寂しげな背中には、戦いに全てを捧げてしまった男の晩年の虚しさが漂っていた。

■『五瓣の椿』（テレビスペシャル／1981年、よみうりテレビ・東映／監督：鶴橋康夫／脚本：服部佳／出演：大原麗子、加賀まりこ、三國連太郎、名高達郎ほか）

「芸術祭男」の異名を持っていた、よみうりテレビ・鶴橋康夫ディレクターによる、珍しい時代劇作品である。彼の現代劇のほとんどがそうであるように、本作もまた異常な心理に取りつかれた人間たちの生態が描かれている。

商家の娘・しの（大原麗子）は病で父を失った。が、母（加賀まりこ）は別宅に若い役者（明石家さんま）を愛人として囲い、帰ってこようとししない。そして、母の口から聞かされたのは、父を蔑む言葉の数々と、しのの実の父親は別にいるということ。しのは母を愛人ごと焼き殺すと自らも消息を断ち、別人になりきって母のかつての愛人たちを誘惑しては殺害していく。全ては、「父に恥をかかせてきたこと」への復讐のために。

本作で三國が演じるのは、商家の主・源次郎だ。この男は母の最初の愛人であると同時に、しのの実の父親でもある。山本周五郎の原作やこれまでの映像化作品では、しのが復讐を進める過程でそのことを知り、そこでの葛藤が描かれるという展開になっている。が、本作は違う。苛烈な物語にこだわりをもつ鶴橋監督は、予め母の口からしのへ真相を伝えているのだ。そして、しのは全てを知った上で、源次郎に近づき、誘惑していく。あえて「近親相姦」へ持ち込むことで、最も憎い源次郎への復讐を果たそうというのである。ただでさえ異常だった物語設定は、さらに異常なものとなった。

そしてこの異常な世界は、三國の狂気の芝居と共に完結する。

何も知らない源次郎には、しのの若き肉体を思うがままにしたいという情欲しかない。

そのため、下心に鼻の下を伸ばしながら、上品を気取りながらもキザでスケベっらしい口ぶりで、しのに迫ってくる。

そして、二人はついに床を共にすることに。しのの股に下を這わせ、執拗なまでに愛撫をする源次郎に、しのは言い放つ。「おとっつあん」と。ここからの三國の芝居の変化のさせ方が凄い。

「ええっ！」と飛びあがり、真相を聞いて「う、うそだ……」とうろたえる姿には、これまでの余裕は微塵も感じられない。しのが「抱いてちょうだい、お父さん」と迫ってきても、「よせ……」と逃げるのみ。そんな姿を、しのは嘲る。

今にも消え入りそうな声で、体を震わせながら「それはいけないよ。そんなバカなことはよして、考えなおしておくれ……」と頼み込むと、最後には泣きじゃくってしまう。そして、しのは去り、残されたのは源次郎。だが、その姿は変わり果てていた。青ざめた顔、生気のない瞳、自らの涎で手を濡らす、呆然自失のあまり発狂してしまったのだ。朝の街をおぼつかない足でいく源次郎は、自分の店も気づかずに通り過ぎてしまう――。

三國の見せた壮絶な落差が、愛する義父のための復讐に生涯を捧げたしのの執念の壮絶さを伝えている。

その演じてきた役柄の多くは現代劇の時と同じく、人間の悪意をそのまま象徴的に具現化したような、ヌメリ気のあるものであった。言わば、「人間悪」と呼べるものである。当然、ヒロイックなものはほとんどない。そんな役柄を、三國はどこまでが芝居でどこまでか地か、その境界線の見えない芝居で演じてきた。だからこそ、その突きつけてくる理不尽な状況は、より逃げ場のない、容赦ない残酷なものとして観客に突き刺さってくる。

その特異な芝居とキャラクターはドラマに理不尽な状況を生み出し、時代劇に異常かつ非情な色合いをもたらしてきた。彼の演じる役柄が毒々しく輝くからこそ、理不尽に苛まれる人々のドラマは深まりをもち、それに立ち向かう主人公のドラマが盛り上がる。

時代劇に欠かせない名優が、また一人いなくなってしまった。

【DVD 情報】

『切腹』（ブルーレイディスク、SHOCHIKU Co.,Ltd）

『関ヶ原』（キングレコード）